後世伝授事

内

遠13
666
2

亀伴

東京帝國大學圖書之印

渡世傳授車巻之四

目録

道具目利

獵師

宰人

明治三六年九月十一日購求

連門 666 巻 4

渡世傳授車巻 目録

渡世傳授車巻之四

道具目利

目利とゝハ大方なるべし。其家より生れたゝさい時〳〵ゟ仕付て。傳授車乃ゟ素人の目利だくするハ。推ゞ門へ出まゐて人より場出され
く仕舞ものなり。縦ハ目利の教ハ其家に源あり。極め。或ハ
土の目利よりけれバ塗抹小跡くゝ乃ゟ賞きハ識者不ゟて
の拙多く。百ゟ目のさいくこハまれなり。大坂上町ゟ高池の乃亀
らく素人ゟ〳〵百れ目き上げゟて。京大坂のそれ者も。見
及ぶぬ者ハ人ゟ見せて。悪と極めるかどゟ名を呼。友ゟ。松村
作神とい万人かゝて。此乃亀ゟ目きくゝ乃傳授ゟ受。仏出
こゝのまりとして我家へゝ。大きゝ乃ゟ蓮ゟ。こゝ乃く風流乃
乃具を出〳〵見せて目とゝ。又吟ゟ無出ゟ見せ。それゟ十日

ばうもえせけるよ。いまゞ程の内まるもえつくさぬよゞ行所かつと
情をつゝ。大方よえ子は拙れ情接ハとたづぬれバ。されバ山ゞ毎日
くえせ子うゝ乃ぞいまゞ沙くゝる蓋この内。沙くゝゞ秋ゝ乃ゝ
山ゝをぬて買ゝまゝ。乃ゞゞ。一ッもやくよ立りのゝ。色ゝどよ
買ゝまゝ。孫バ上よいくゝゞ。といハれけれバ。左とおりひて目
ゝ情接とやゝ。れけゝとゝん。家よ加器物のゝ。よ石孔附なゝう
とゝ。宰人ゞんゝ。お盡ゝゝ。宝ハ身のゝ。合せと乃ゞ孔
奠喰よせ。中よ。宝乃の短人。正年ゝゝずとて又あよも
買人なゝ。色ハ世よあり。附百あよ買ゝて格れ添徒又まであれども。
それともよ仙せゝやと狼よゝねバ。方こへ見せまいれども例方も
月利ハゝゝ仙よ格まり。あまりよ云念よおりひて塩作乃
行殺の金ハ百へ拾ゝきゝ見せけり。祈ゞ若を行殺とゝハまゝ時

用ゝあゝて大坂へ下りよ。源蔵の古乃ぞやよ付代時後のあゞを
あり。ゝれハ乃ゝどゝよあり。一群あゝバ拾よ三十あが和あれども。行殺
まて伝の用ゝまゝどと思ひゞゝ。まゞ垂をゝゞ。ゝれバ拾ゝ五とゝ。
三ゝ中ゝバ宝ゝべゝとゝ。ど幸ゝ三ゝ。ゝもせゞ。まゝうませぬゝと
そゝゝを見まハせゝ。茶の赤焼茶ゝん。ゝ五とゝゝを引五ふつけ。
いゝさまゝ京びもゝゝ。銭よて狼沙ぬハ拾と。ゝ五ゝより狼を毒ま
でつけくゝそこを出。二町あまゝ。ゝやくを法分ゝくゝゝびゝけ。茶
ゝんまけてゝんぜまゝやゝと紫撥を持ゝく遅ゝけ来ゝ。てゝさてゝゝち
でまけハせいゞ彩ゝ。ゝゝゝゝこの見せゝゝ。狼ゝけて浪
せ。ゝまゝゝとゝゝまゝゝ下されませと。其町の張屋よて狼を見てゝゝ。
かゝゝゝふゞゝまゝゝゝゝゝね。全ゝゝもひまハ入ゝれゝも狼一ゝを
まゝけたゝん拾ひゝかゞふ。来ゞゝの色乃ぞやの人世

よさいぜんの行ぎょうの絵あり。これいうれ〜とちひさうの恵とと
へバ是ハ世ゝ西の方の産よ金ハあよ賣をき京〜ゝ北ゆうよ
ハ。西のさる〜着。よづけハちゝ〜ねしかとき紙束い〜〜ま〜〜さ位賣
ますまいと〜。今ハちゝやう袖ハをあゆ方の若も新つきあ〜ゝ。
を射揚ぐ式十あハ北あり。添菓乃ハ志ねてゆ百文よハ弦ざる
あり。せんこされくゝあるまひとゝ。ゆうひを付さんろう弦ハず鬲ハ先
ぐん後だんじやくちゝ〜かじ。ゝ拾あよ賣へ〜と。玄理よ志ねて
賣ろう。ゝ。ゝ大阪ちをやうて京の方へ乾ゝ戻り。添菓の左
ゝゝやゝちゝとつきそんかとの絵恵とおちゝて賣ゝへ〜ゝとゝへ。ま
そつとさきよ西の方の人ゝくゝ人へま〜。今ゝあよぜひくくれと
賣ゝてゆれま〜ゝとゝ。面ゝ三宝とハ恵よ絵ぬれとゝ
してすぐくゝと宿よゆう。新ふかくゝと咲せバ。あのたゝけづゝめぶ袋

の右左よも氣をつけど賣ゝ人あゝうゝどゝ。それハ紫ゝんをゝまで
遠ゝうけてゝう。根ゝうけるのゝ足せよあくれとゝ。ゝ入ゝくあゝどゝよ先へ
まハ〜ゝこのゝどゝやとゝ。ゝ〜れ。ゝゝ。ゝゝめて氣ゝづつさ。ゝ会よゝひ。目
利ゝ第一よ修練せ〜ゝう。行弦の金七とて名代りのなりゝかの
宰人金七よゝ名ゝの宝氣乃短尺をゝ足せけれバ金七ち〜ゝと足
ゝ。歳ゝどゝ正ゝまゝゝゝ人あくゝト〜ゝども。ゝるハかゝやゝれ物一切ゝれ
ゝさゝず色ゝまれ色ゝく人。ゝゝ〜ゝト直ゝゝひきゝ弦ゝで十ゝ表
までよゝいゝゝべ〜ゝといへバ。宰人ゝ姫〜ゝく。よゝやゝうよ和ゝるゝと
金ゝ張ゝ元ゝぶゝどゝくゝまかゝう。袖ゝもゝく引ゝひ世界ゝゝや。目あきゝ
人目ゝ〜ゝゝ人方ゝへゝ足せゝれど元ゝ来宝家の時代よいまゝゝ
短ゝ天ゝとゝゝゝゝハかいゝとゝゝすゝそ似拍よ極ゝし。ゝすゝゝれ弦
もゝまゝる明命ゝあゝゝと。ゝゝかゝて金七ハ賣ゝゝといゝゝゝや宝家

のこんぞくよいよせどくぐいぬうとかゝる世する者よりぐれ八分
よ変りてその数員のきれぐかりめ十弐あよ変りて二日ゝぬ
うちよ四十二度これも釈ぞもよ者ゝれゝおうげく

猟師

山を狩りし流を猟するれ後世名八何しけれども無紙者多
あり。又川辺のまゝ人鱈鮒を殺殺して殺。山家の百姓猟を
仕く猟をまどるの者ひ。ゝ後世あゝざる者八たゝてせまゞき業
ぞゝ。第一仏法よおゐて因果のゝ理をきくゝとの報ひおれがゝ。
或八如加歳月の流八奥の数ゝ。元人の数多ゝゝいでも。ゝ
奥もたゝず年中猟する人もつさざるも者ものゝとひあゝ。
ゝゝ奥とゝるれ立夫さまくある中よも。あのゞ行をゝッ指さまくよ
ちゝめく奥とゝ八きゝゝ。又ふゝのゝとゝ会がけよづゝゝする

者んどさうとハゝめゝとゝゝうとゝゝれどゝ人の後世乃よすが
よもあゝず。とのれくゞかゼぎの者ゝとゝゝれを家よ生れ
後世とすゝりのさやうれちいさゝれよハ人をよ世後。名ゝすゝて。
素人の及ばぬ仏ゞ車のゝれゝうとねをゝてあゝ。あさまゝゝの
いとあゝよゝゝや後の世八鬼ともあれ。ゝよゝあるほの生田川の者よ
後八とて者ゝとゝつて今日をくる猟師あり。ゝまゞよめゝを沼て。
人のえゝゝぬ翔も者ゝずとゝるゝ。後八自慢のあまりよ。
今れ家中よてにときゝ者八細術の指南板社度ありとも。
我細よかけあゞ自世八ちゝゝゝゝゝと荒言ゝゝり。ゝ板社
とゝ人八郎ゝ一谷敦盛人寺様の代家中。板社神ゝつとて長法
のゝひさくよて三百石ゝり。刑一家中の者人乃所医よて門弟数
者ありて名ゝ者ゝ人ゝり。或付者ゝ者ゝ者ゝ集り吐ゝ吐次よ

よ市金升八ヤさるく八拙者ク家来糸ゑ武ハ生田川ゑの
者あるゞかれゞ左而よ孫八とやて細の上ゑ四方てていやう
のるもよくちりトゞかれゞアトハたとい板社神ちつどのく祓祈あり
とも。我細よりけバたてこうせゞとやまう。祓祈も細よハ
とよゞぬりのよいやとあれバ。行い賜しき者乃雑言こるよ
うしじ。細ゑどよてそゞへのうるりのよあゞどといへバ。ろ氣
乃面にとそろく。よくきかれあゞ荒云ゝゑ。ひゑよてさゝとう
バ紙いひつのりアべし。よびよつハし主てにとさうぬやうよんせ
つけゑと血氣よまくせいひのくちるゞ。祈ちつもんちゝゞち細
とねて有ゞべしとの役孫八何ゑんあく。毛ハかるちしせて四厳先ハ
れ保表義いゝくゞぞと胸のうちよて義邪ゝ。かゝこまりトと
ゑ迷ゆけゞ。これへ通せと白状へよび。孫八とハを方ゞるゑう波

猟よ妙をゆ板社ゝ細祈ありとも細よゝけく働さゞゝといゝ
ゝきゝ及び試んとめよびよせうゝいでさうバ板よよちて
ゑよとのゆこと。孫八をどうき張とゆよつけこれハとゆ迷惑ゑ
万金くれれよヤうる笑へゑゝ。まひのゝ四光下されませとヤせ
バ升八すゝ出。身ゞもう家糸ゑを方とゝ安くゆゞヤせ
ゑ姓よゝゝうう。今ゝうう陸ずゝともけゞれあうまゞ。さんひ
トこ乃義よてゝへハゝ。あゞにはゑ百ヤうるふもゑされま
祓祈祈祈と細とおねよゑうすねもゝ。ぬるれゝてのう
しゝゑされトされ。行るもれ四るしトされと佗ゝれゞも祈ち
ゝゝ入ゞ。たとひいゝ拙よあゝゞふともけゞれハあるまいちと本力と
ねくねよますれバ。あゝらゝてを方ゞ痛ひやうよハせまゞ。毛
拙くとゆるさぬゝゝきゑれゞ。祈ゝ今ハけゞれわゑとおひ

和らバ位よもてさびやべ　すくでうたくと木刀をひつさげ
出れバ。とてものよまえ細よてれ出おされませとてふ。袖をつ
いよくん勇り。はぐ金下うあひがといハる時孫八やう。されど
ゑるとそりは附。山方よ世勢ふあれバそりそぐ〜ん。悪友ふと
ちりは附一郎よてもおぐ〜やさぶ。今おまへさ女木刀よて痛
まぬやうよれあ〜らひトさるとゑるときハふよゆるこ出。
又まえ細よておそぐせバ一金下あ〜とゑるときハ世弘出やさ
ずんよそうれ郎ひやひと。まえ細よさせ。其あひ一弘ぢうを
面でて。郎ひよ声をうけるをおぶと定め。ゃっといそうる郎
く袖をつ孫そう孫八よ切つるとえ〜ぶ。孫八ひ〜をと赤
ゑるとひと〜く細ようけく〜こう〜う。面目おげよむぞく
乾あぐりておぐ〜　ふ業とりぐ〜し。扨こ其方細よめをはう

我乃よいまぐ〜ひかくかし。そうつよ山方後へ遠ひこう。今一度
こ、孫八ゆゑ。山度八郎を横よかまへ声とひそ〜く電光のご
とく孫八ぐ後へ飛越大袈裟ぐ衣よきうんとせ〜を。孫八郎を
ひねりうしろざ海よ打ひ又引こう〜けれバ。才子の面く紅
よ汗をよぎりゐそうま一度こいと新八天火のごとくせきあげく
と孫八やう。まづれふを静めうまへさやうよれせきおされてハか
とまいりぬりのあり。去おぐ〜業変しても用〜れるあり。元子ま
れ云男ふ拒ぢゑるべ。まづよくこ〜めーやセトさるべし。れ若
ゑりふ山ぐさよふをよせ。とせいと住う素子を素ひやゆよへた。
越ありて元を孫ぐづうよすまそうゐ拘をさへ元ぐづしやゆるかし。
次や孫ゆかかハぬ其又天の沖身を細よて寸ぐづしてハちさい
崔めぐとれる拘でいごさうませぬといひけれバ先こ理よくし

てごとと笑ひよあり作りぬ

宰人

浪人のとせいとハ細御指南殿四師。中ハ名習れ師匠人形細工。下ハ楊枝耳うきれつきつけ賣仕ても。扨はうるうぬりのうるようぬるとハ名ひおぐ〜宰これ使よハ例おきよ〜もあうずと扶子宮ぬよおりひとう。切れ夜盗と志〜切系ハ大方ハこの〜よありて。家名をけづすハ痛まうしるやいえん。浪州東川乃不動といつるハ往昔信こ未京極の家臣岸川監物根来のきりりこ乃不動を信じ其尊像を写〜をれ〜れ堂なり。山度修覆の就化と僕〜。を立を里をを加〜るよ。名高きを尊とて人出うおづき。残米よおど集り。世ろのはりりハ金貴目も考りくるやうよ風実すれども。うりとハ今れ世よ多ひ相ハたごこれまね者と

手加の青瓶徹〜三百廿日ばうり。これよてハどこの碧へもたらぬ弓用帳よても僕〜〜〜〜さんと。ぬや年考りお使〜て吹り〜し彩。ふ動堂の門内よ人のうめく声徒ぶ不寳よおりひ。央をこの〜後く見れば。大の男ぬつけよ変。よ桟布を拭くる〜げよ使〜う。すや盗人よと祭おち数よ村中考り集ぬ。ろと〜ぬ〜よびいけ祭ば。人ぬちつきひ祭とんて。大よ敬るき地ふ跪き私義宰人よて今日の波世ぬく。素子を書〜人使りをさます。ふぬすこ〜く。潮務令下と繋ぎヤ布よ。者不新堂よ加瓶紫く集り出産よ〜〜り及びあび入ごうやうかやう林布と〜う。これまで出く変よ。拾分大あるれ坊一人遣かけるひ。それ〜へせさふきよおねて八見よ和ふせんと修きうれ〜ふどよ。れくかへ〜切つけトハんとろ〜よ。天祭すくばり。よ考ちぐこて息もきれトやうふ

見へひげを剃の身行も見へ申さず。兵今又被れ坊に出あつて銀とかへすゝへハゝ糸をゝ仏乃意樂ゝ助るぞと行きゝるとあゝへバいづれもふびきゝれ。扨くれを已や此已屋ふつくぬすこをやめ。出家遁世の身ともありゝハんぷゝゝ

されといへバ。村の若どもきゝ。扨ハねをと人まゝびるゝ。此の法よて養巻をゝて海へ沉よかけるゝ。見悟せよとゝ其掛ゝ

住ちおゝゝゝぶ。左の法とハいひゝ。ゝゝがれゝ性をきくゝこれハ

ハなゝ弱ぬすゝをゝゝゝ。ゝ不動乃金縛とハいゝゝゝ。右

懶き奴なれども。なゝの行よ張をかすゝハ。仏の意樂よてたす

ゝとあり已とゝれく肌夫の身ゝゝて命をゝゝハ。ゝゝれくゝ罪

あゝゝべし。見性くれたすけあゝべしといゝれども。此の若ども

きゝいれず。ゝやさあれバとて此の法よハかえゝれど。見性とも死

よかけんとゝゝをぬすゝをくゝとゝゝげきかゝゝゝ我一人お果ゝへバ

素ゝよゝゝゝゝ親喝命よゝひゝ行とぞゝすけゝされとゝび

けゝゝゝ住ねをゝゝ命とりゝハゝれバ後のゝゝねゝゝゆゝゝし

かへゝ。扨もゝゝきれなゝゝゝよゝゝ伝ゝゝゝゝゝ世上

よ隠れなく聖弘あゝゝありとてゝやり生ゝ男女神を

ゝゝ糸治。たゝまねどなかもゝゝ季ゝゝぬゝち古貴ゝ百

目ゝゝゝ。堂ハちいゝゝ二三貴目ハ入ゝゝ。畑山ゝと買つけて

永代の修度樹ゝせんいやくあゝけ入て堂と結構よゝゝし。

ゝゝく後命ゝ功りけゝゝ其教又盗人まゝ。住持も男もおゝゝ

くゝひとれゝゝハれて出けとてゝまゝずゝゝゝに貴ゝ百目

ハゝゝ貴目ゝゝて出ゝゝ。ゝ門ゝゝよ結死ゝて后つゝめと出ゝく

これハゝ来ゝれど住ゝゝゝめくゝ肝どゝゝゝゝやとゝひゝやゝ。あ

此ケキレ
ダル浪人
右ノ方ニ
脇差ヲ
サシタルハ
如何ニ
但シ軍
ノアヤ
マリカヤ

こうれん人くを新し遣うけさせられどもあとうこあし。元やう
やうぶ世ろへまてぶ分ぶくこよろしかゝば。人くの信もこう。
不動もくやうやうぶ行べし。ぶづれもいるかゝ行ぶ行あゝとにとう。
借銭してゐうとも先堂を彼慶し。人の信乃さめぬやうゝと
談合こさハゞ。ゆゝく書語も大方すこゝろ比歴とゐろ武士一
人ゐあまゝつれ堂へ来語し。任指る新面と乞拙若ゐ多ハ永ゝ
家人仕り。其ゝゝ人とんでくこゝ武士。俗世雑家仕ろ拙
う。ぶ堂家加張大分あつまりあろう。ゐりぬすくゝ入り
ヤされバなのかゝてゐづゝ三百目あり。これなてゝてもゐ叶ひ
かゝ。まそいと金ゐゝて借ト度ぶざとうゐいて拙まられ。
人くゐ信ととてさせぶなかをいゐ考させてのゝ元貫目ぬすゝ
借用ヤい其借用張ゐてゐ。君も世ゐ先。ゐくもゐ知り

安堵仕人ゐひゝ人ゐぶ不動ゐ乃おけありされバ元張元貫
目一倍ゐて共今張ゐ拾貫目ゐ加ゐつゝゐ行ぶ分武運
ゐ久天下泰平ゐれ初りゐ下されと彼くゐりけゐ拙ゐてゐゝ
ゐゐ堂を建立ゝ山畑秋実紛繁昌ゐ土地とゐるこそ
めてゝとゐれ

波せゝ接車巻之四